

支援学校高等部カリキュラムの検討 新型コロナウイルス感染症に係る臨時休校中の生活についての調査を通して

和歌山大学教育学部附属特別支援学校 道上里砂
和歌山大学教育学部 山崎由可里

1 はじめに

和歌山大学教育学部附属特別支援学校(以下和附特)高等部では、生徒の実態に応じ、平成24年度よりカリキュラムの改善に関わる実践検証を行ってきた。

それまでの和附特高等部のカリキュラムや各教科の学習内容だけでは不足すると思われる青年期の心の持ちよう等を扱い、将来にわたり自分らしくよりよく生きるための土台作りにつながる学習内容の開発と実践研究に継続して取り組んでいる。

また、平成27年度より、知的障害や発達障害のある生徒たちにとっての「教科」学習について掘り下げ、仲間との学び合いを重視し、知的好奇心を高める教科学習の充実を目的とした実践研究にも取り組んできた。

これらのカリキュラム改善にあたり、青年期入り口にある生徒にとって、生徒自身が「学びたい」「役に立つ」と実感できることを大事にし、自分の人生を自分のものとして捉え、自律的に豊かに歩いていくために必要な学びに重きを置いている。

本報告では、令和2年3月から5月にかけて全国において実施された新型コロナウイルス感染症対策に関連する臨時休校中の和附特高等部生徒の生活について、実態調査結果をとりまとめ、調査から明らかになったことおよび高等部カリキュラムの改善に繋がるポイントについて若干の考察を行う。

2 アンケートの概要

a) 目的

これまで誰も経験したことのない、新型コロナウイルス感染症に係る対応が必要とされる状況下において、生徒は家庭でどのように過ごし日常の変化に対応していたかを調査分析し、高等部カリキュラムマネジメントに役立てるものとする。

b) 調査対象

和附特高等部生徒とその保護者

c) 調査期間

令和2年8月7日～令和2年8月31日

d) 回収率

生徒:26/28 保護者:24/28

e) 質問項目の概要

生徒用には、自分が主体となって毎日を経営することができていたかをはかるため、質問内容に合わせ①自分でできた、②家族に言われてできた、③できなかった・わからない、の三件法と自由記述とした。

保護者用には、休校中の生徒の様子について等、質問内容に合わせ、三件法、複数選択、自由記述等を使用し、質問2と質問7については複数回答可としている。

3 アンケート結果

生徒用アンケート(表1)、保護者用アンケート(表2)の両方において、普通科コースをF、普通科総合産業コースをSとし、コース別¹⁾に集計した。

生徒の回答からは、「すすんでスポーツに取り組んだ」という項目においてのみ、できたと答えたSコースの生徒が6割を超えた一方、Fコースの生徒は2割程度に止まったが、その他の項目においてコース間の差はほぼ見られなかった。

一方、「宿題について」の項目で、Sコースの生徒全員がすすんでできたと答えたのに対し、保護者は6割にとどまるなど差が生じたものもあった。

「早寝早起きができただか」の項目に、できなかった・わからないと回答した生徒が3割を超えており、通常の生活と比べて自身の変化を感じていた様子がうかがえる。一方保護者からは、生活リズムについて「変化はなかった」「変化はあったが困るほどではなかった」との回答が9割を超えたが、「オンライン朝の会」²⁾の実施により生活リズムが改善したという回答が複数あり、特にSコースが目立った。また、オンライン朝の会に参加した生徒³⁾については、全員が「すすんで参加した」と回答している。

また、休校中の「日中の居場所」として家族の誰かと過ごしたという回答が7割を超えた。これは同じく休校中のきょうだいや、祖父母と過ごしているケースが多かった。Fコースの生徒は放課後等デイサービスの利用していたケースが4割強あ

ったがSコースでは1割に満たなかった。

約8割の生徒が、「家族のために手伝いをしたり家の仕事を手伝ったりした」と回答しており、保護者の回答において「休校期間を利用して新たに取り組んだこと」があるケースは4割近くあるなど、休校中も課題だけでなく自分のできることを見つ

けやってみようとする姿があったことがうかがえる。

保護者は、「校中の連絡手段として手有効だと感じたもの」として①メルポコ⁴(約8割強)、②電話(約8割)、③オンライン朝の会(6割)の3つが多かった。オンライン朝の会を有効と答えた保護者の比率は、FコースがSコースをやや下回った。

表1 生徒用アンケート集計

		F	S	計	F	S	計	F	S	計
		①できた			②家族に言われてできた			③できなかった・わからない		
1	早寝早起きができましたか	5	6	11	3	3	6	5	4	9
		38%	46%	42%	23%	23%	23%	38%	31%	35%
2	すすんでスポーツに取り組んだり 身体をうごかしましたか	3	8	11	3	0	3	7	5	12
		23%	62%	42%	23%	0%	12%	54%	38%	46%
3	バランスの良い食事を こころがけましたか	11	11	22	1	1	2	1	1	2
		85%	85%	85%	8%	8%	8%	8%	8%	8%
4	宿題を自分からすすんでできましたか	12	13	25	1	0	1	0	0	0
		92%	100%	96%	8%	0%	4%	0%	0%	0%
5	家族のために手伝いや 家の仕事をしましたか	10	10	20	2	2	4	1	1	2
		77%	77%	77%	15%	15%	15%	8%	8%	8%
6	オンライン朝の会に参加しましたか	①参加した			②参加しなかった					
		12	13	25	1	0	1			
		92%	100%	96%	8%	0%	4%			
7	オンライン朝の会へは 自分からすすんで参加できましたか	①できた			②できなかった			③できなかった(わからない)		
		12	13	25	0	0	0	0	0	0
		100%	100%	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
8	オンライン朝の会に参加して よかったと思うことについて 教えてください【F】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの顔が見れてよかったです。授業が楽しかった。 ・楽しかった。みんなにあえてうれしかった。 ・みんなとのやりとりが楽しかった。 ・みんなにあえてよかったです。 ・みんなにあえてよかったです。 ・たのしかった。 ・クイズがたのしかった。 ・勉強もできたから楽しかった。 ・みんなと話ができてよかったです。 ・健康観察ができてよかったです。 ・参加してよかったと思うことはない。 								
	オンライン朝の会に参加して よかったと思うことについて 教えてください【S】	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと少しでもはなすことができすぎてうれしかったです(1年) ・内容がとてもおもしろかった。ぜひ通常の授業(教科)もやってほしい。 ・自粛中に授業ができてよかったです。 ・普段学校でできないテンションでできてよかったです。 ・朝の会があるから起きないといけないので、早く起きることを意識できた。 ・みんなの大切なものが見られてよかったです。 ・オンライン朝の会のために8時半に起きるようにしていたので、学校が始まってもそんなにしんどくなかった。 ・スムーズに朝の会にさんかでき、ZOOMの機能がいろいろ知れてよかったです。みんなの様子を知れてよかったです。学校のことを家で話題にできた。 ・休みの間ずっと一人ですごしていたので、久々にみんなの顔が見れてよかったです。 ・みんなの私服が見れた。 ・みんなの顔が見れたのでよかったのと、勉強ができたたり現場実習の話ができてよかったです。(3年) 								

表 2 保護者用アンケート集計

		F	S	計	F	S	計	F	S	計
1	生活リズム	①変化はなかった			②変化があったが困るほどではなかった			③変化があり困った		
		5	4	9	5	8	13	1	1	2
		45%	31%	38%	45%	62%	54%	9%	8%	8%
2	日中の居場所	①家で家族の誰かと過ごした			②家で一人で過ごすことが多かった			③デイサービスを利用した		
		6	10	16	5	4	9	4	1	5
		55%	77%	67%	45%	31%	38%	36%	8%	21%
3	家庭での役割	①家族のために決まったお手伝いをした			②特にお手伝いはしなかった			③お風呂掃除、食器洗い、洗濯、ゴミ出し、ごはん炊き、水やり、車引き、掃除機かけ、料理 など		
		7	11	18	4	2	6			
		64%	85%	75%	36%	15%	25%			
4	学校から出た宿題	①すすんで取り組んだ			②すすんで取り組めなかった			③わからない		
		6	8	14	0	4	4	5	1	6
		55%	62%	58%	0%	31%	17%	45%	8%	25%
5	休校期間を利用して新たにに取り組んだこと	①ある			②ない			散歩、自転車練習、部屋の掃除、花壇の手入れ、手芸、ギター、家事（洗濯）、ダイエット		
		4	5	9	7	8	15			
		36%	38%	38%	64%	62%	63%			
6	学校との連絡について お子さんの様子や課題の調節などに関する 担任との連絡・相談	①おおむね適切だった			②不適切だった			③わからない		
		9	12	21	0	1	1	2	0	2
		82%	92%	88%	0%	8%	4%	18%	0%	8%
7	休校中の連絡手段として有効だと 感じたもの	F	①電話	②メルポコ	③ホームページ	④プリント	⑤家庭訪問	⑥面談	⑦オンライン	6
			9	10	2	3	0	0	0	
		S	10	10	2	2	0	1	9	69%
			77%	77%	15%	15%	0%	8%	69%	
		全	19	20	4	5	0	1	15	
79%	83%	17%	21%	0%	4%	63%				
8	オンライン朝の会に参加して 感想や、お子さんの変化等 お気づきになったこと【F】	<ul style="list-style-type: none"> ・喜んでた。 ・参加していたがいやだったようです。 ・楽しんで参加できていたと思います。「もう少しで始まる」など時間を気にすることができ、それに合わせての行動ができた。 ・先生方や友達的笑顔を見ると嬉しそうでした。学校だったら先生にサポートしていただけますが、オンライン朝の会だと、家で一人で理解しにくい内容のものは、保護者のサポートが必要でした。 ・「登校と同じこと」と言う意味が理解できていたのかいかなかったのか…。とりあえず時間に間に合うようにログインしたという感じでした。始まる前にログインしてもよいよと言われても、コミュニケーション力が乏しいので、特に興味はなさそうでした。未だツールとして興味が薄かったのかも。 ・より規則正しい生活リズムになってよかった。 ・みんなの顔を見られて喜んでた。時間前に準備していることがよいと思った。 								
	オンライン朝の会に参加して 感想や、お子さんの変化等 お気づきになったこと【S】	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日、楽しく参加していました。オンライン朝の会があるので、朝早く起きたり準備したり、規則正しい生活を送ることができたと思います。 ・オンライン朝の会が始まると、朝のリズムが整ったように思います。入学式依頼、顔を合わせていなかったのが緊張していました。 ・最初は慣れないことへの戸惑いもあり、ストレスに感じているようでしたが、回数を重ねるごとにリラックスして参加できていました。仕事から帰った母に、オンライン朝の会での出来事を楽しそうに話してくれたこともありました。 ・あまりよくなかった、子どもが嫌がった。 ・他の人のことも教えてくれました。音段と違うことなので楽しそうでした。（それまでがつまらなさそうでした） ・とても効果があった。朝起きる習慣ができた。クラスメイトに会えて嬉しそうだった。 ・とても楽しそうに毎日参加していました。家にいる日が多いことではじめは不安でしたが、学校にいる時より心がゆれず、落ち着いていたように思います。 ・友達や先生の顔を見て話しができると、タブレットを使用するのがうれしかったようです。自分からすすんでやっていました。 								

4 まとめ

今回の調査でまず見えてきたことは、未曾有の事態とも言える感染症対策としての臨時休校に際し、大人も子どもも見通しが持てず不安な状況下であっても、多くの生徒たちはそれぞれの家庭においてすすんで役割を果たし、食事や健康に気を付けようと自律を意識できていた様子がある。

和附特高等部が平成 24 年度より実施している新カリキュラムでは、Sコース「セルフデザイン⁵」やFコース「キャリア⁶」といった教科等合わせた指導の時間を新設し、自分らしく生きるために必要な知識やこころとからだの持ちよう等について扱う多様な学習に取り組んでいる。自己と向き合い、自他の価値観を認め合う事を大切にする学びで培った力が、今回の「生活の変化」への対応力にもつながっていたのではないかと推察するところである。

しかしながら、早寝早起きなどの生活リズムやスポーツなどで身体を動かすということについては、実際問題として生徒自身が行動をおこすことに難しさもあったようである。外出に制限がある期間であったことが影響している可能性もあるが、日中家で過ごす時間が長くなるとともにゲームやSNS の利用をだらだらと続けてしまい、生活リズムに乱れが生じた生徒も少なからずいた。余暇の過ごし方の充実が望まれるところである。日中の居場所として F コースの生徒が放課後等デイサービスを利用しているケースが 5 割弱あったが、Sコースの生徒の利用はほとんどなかった。このことから、障害が比較的軽度の生徒の発達年齢と特性に応じたニーズを満たす社会資源が少なく、安易に心を満たすことができるゲームやSNS 等に時間を費やしている様子がうかがえる。また、

そのように過ごす時間が長くなればなるほど、自己コントロールが効かなくなり悪循環に陥ってしまう。このことは、発達障害や軽度の知的障害がある生徒の興味関心や知的好奇心を広げ、主体的にかかわることができる活動場所や社会資源を開拓したり、趣味を創出したり、新しいことにチャレンジしようとする姿勢をはぐくむような学習内容を充実させることの必要性を示している。

最後に、我々教員も手探りの中、臨時休校中の生徒への最適な支援と学習保障をめざし取り組んだ「オンライン朝の会」であったが、これにより生活リズムが整ったという回答が多数あった。保護者はもちろんのこと、生徒の回答からも、生活リズムが整ったことを実感できた様子が伝わった。さらには「みんなと会えてよかった」という人との繋がりを実感し、その喜びを感じる経験となったようである。F コースの生徒の中には、家族のサポートなくしてはオンライン授業に参加することが難しく、その意味を理解しづらい生徒もいたが、ご家族の協力のもと参加し、友達の顔や言葉がけを楽しむことができた。また、発達障害の特性のある生徒が、自分の苦手な思っている生徒が画面に映っているのを見て参加しづらくなってしまったというケースがあった一方で、対人に緊張のある生徒が、声だけの参加から自分のペースで徐々に顔出しできるようになったケースもあった。生徒の認知の仕方は様々であることを前提に、個別のニーズに対応するための創意工夫を行いながら、ICT を積極的に利用することで、生徒の主体性を育み、新たな興味関心につなげることができた取り組みだったと考える。

1 和附特では、小・中学部からの内部進学者を対象とする普通科コース(以下Fコース)と、地域の中学校を卒業した入学者を対象とする普通科総合産業コース(以下Sコース)から成る2コース制を取り入れている。

2 和附特高等部では休校中(4月下旬から学校再開までの期間)オンライン会議システムを利用し、同時双方向型のオンライン授業として、30分単位の朝の会(「オンライン朝の会」と呼ぶ)を毎日実施した。

3 高等部 28名中、オンライン授業に参加するためのインターネット環境が整ったのは 24 家庭で、学校に登校してインターネット回線を使用し参加した2名を合わせ、合計 26名(アンケートを回収した 26名の生徒のうちでは 25名)がオンライン授業に参加した。高等部生徒が学校の授業で使用するために全員購入している個人用タブレット PC に、オンライン会議システムをすぐに利用できるよう教員がセットアップしたものを生徒が持ち帰り使用した。

4 和附特で使用している保護者向け一斉送信メールシステムの名称。

5 S コースでは、青年期入口ゆえの心理的な課題を抱える生徒が多く在籍することから、自分の将来について目標を持ち、よりよく自己実現していこうとする意欲など、内面を育てるといふねらいで平成 24 年度よりカリキュラムに取り入れた。他者との関わり合いの中から自己を見つめ、自分らしい生き方を考える力を育む。生徒たちが互いに関わり合うことを大切にしながら、ともに課題に向き合い、自他の価値観を認め合っていくこと、自分の将来について目標を持ち、自己実現を目指すことができるように指導内容を設定する。

6 F コースの生徒にとって必要とされる、自分の卒業後の生活を豊かにたくましく暮らすための土台づくりとして、「進路」「情報コミュニケーション」「こころとからだ」などの分野における個々の発達に応じた正しい知識を身につけるといふねらいで、平成 28 年度よりカリキュラムに取り入れた。

2020年度「共同研究事業」活動概要報告書

実践研究課題：身近な生活課題に対応した小学校家庭科の授業づくり

和歌山大学教育学部 山本 奈美・今村 律子・村田 順子

和歌山大学教育学部附属小学校 静川 郁子

令和3年度近畿小学校家庭科教育研究大会 和歌山大会実行委員会

(代表：橋本市立学文路小学校 教頭 丸井 利恵)

1. はじめに

小学校家庭科の研究グループでは、これまでに行ってきた附属小学校及び各地域の研究会との連携を今年度も継続させ、研究会ごとのテーマで授業研究に取り組んでいる。今年度を実施した内容として、附属小学校における授業研究と、来年度の近畿大会に向けて伊都地方技術・家庭科研究会が中心となって組織している令和3年度近畿小学校家庭科教育研究大会 和歌山大会実行委員会との取組について報告する。

2. 活動の概要

(1) 附属小学校

衣生活内容のうち製作実習には多くの時間数が必要とされるにも関わらず、業者販売の作品製作キットが用いられることが多く、製作経験や作品完成の達成感だけが結果的に学習目的となりがちであった。学習指導要領の改訂により、「B衣食住の生活」の衣生活では、(5)生活を豊かにするための布を用いた製作の中で、内容の取り扱いとして「日常生活で使用するものを入れる袋などの製作を扱うこと」という一文が追加され、家庭科では従来にも増してさらに、思考力や判断力などを用いた問題解決的な学習を行っていくことが求められるようになった。このような背景をもとに、次のような連携を実施した。

① 校内研究会「思いを形にして生活を豊かに」(9月11日)を位置づけとする連携

6年生の袋物の製作では、昨年度も探究的な学びとなるように、作りたい袋をイメージし不織布を用いてためし作りをし、袋の大きさを考えるという授業を行っていたが、今年度は一連の製作学習における学習目的を明確にし、それをさらに発展させた。その中で、「ゆとりと縫い代」および袋の種類(手提げ袋と巾着)を理解させて、製作キットを用いることなく、作りたい袋を子どもたちが製作する学習内容となった。校内研の前には他クラスの授業参観により、焦点化した授業をめざしたが、直近の1学期に製作したエプロンの作り方が子どもたちの頭から離れなかったため、三つ折りという布端の始末にこだわる児童が多く、それがためし作りの妨げになってしまった。

また、その後の製作学習授業にも複数回参加し、子どもたちがさまざまな布を持参し、思い思いに自由に作品を完成させていく様子を観察した。その結果、やはり製作するだけの授業から抜け出すことが困難であることや、児童が作りたい袋物製作には、小学校段階の技能を超えた内容を含んでしまうこと、さらにミシンの使い方が6年生秋でもまだ確実に身につけていないという問題点などを見いだした。

② 冬の研究発表会「エプロンを作ろう」を位置づけとする連携

授業実践日：2020年12月16日(水) 協議会：2021年1月23日(土)